林集 上下

後徳

[illegible]圖書館藏

林下集上　四季部

皇太后宮大夫俊成卿十首題よみてさやしおくれしに

立春

たふゝゆるえるさゝちりかゝるあふきつせ
谷きのし水こもたつみともむすふなり

按察使公通卿十首題を人々ま
よませつかはしに

晩霞

なこのうみの霞のまよりなかむれは
いる日をあらふおきつしら浪

雲のうへしすゑ霞をよそにみる
あみちゆるにしやおきのあさみ
みよをこゑくこゑをあふいきふれ
はるのうみの草のに

むめのはよこゑうちつけをたひいまそみ
なくむしいなきをらましゑの城

うくひすのうゑをみちのに
うくひすのをすゝしきはるおしてかすみの
むめのはなをしはしみをしくなみふのふ

わかなをよみあめる
いはしのこゑあるをのくゐよいきはれ
てあさなかむこらちゑ人きさみなを
うへわかみはるのこゑちまし　ゆふあくの

うらみてのかへるともおもはゞはる霞

いさやこゝろのひくらしもくさ小家

むかしのゝゐとよなきわきはみなみも

残雪を

ふるとしのこゝろみさらしといふなく梅

かけて春ゆきのころしゆま

梅

をひかよふにまつ春むめのそらし

うちくら花まつ我よ人やあさひく

月あらしわし夜むめの花のこゝろを

まよつけく大文の小傳経のもこえ

中秋くわし

あるのよ春月まつのむろむ見のそれ

いつもまかでもかくれさわ人の事

夜す

雨やなしこいひ夢人のあはいろかこつも

まつ人かくに月やみもくらん

残梅を翫といふ題を

かきねなるあかりく残すつほみなるさへむめの香し

いかにせしはなとめましのは

門前柳といふことを

わか宿やなきのいとかつきなひき

春よりなかよそふ人をなし

春雨を

はるさめはなにさけたる春さへ染乃

よもの山いろなつよみなりける

春駒を

あつまちの野さへのおもてけふよりや

はいまゆるこまもあしきしたしき

あるくれたるこまのこゝもとるわきを

よそにかたらよまの鳴こゑをきみせ

俊成卿十首哥人ゝて文侍しに詠也

わかやとはよしのゝやまのあらねとも
しられさりけりたえてまつ哉
花のうたとて
はるきゝのもたははや白雲か
かさねかゝれる森の桜かくも
待隣花といふ題を
さくら花はやくさきけよなりぬれは
もとのこゝろをまちもぬれやさくら

三条大納言実房 なさにさらに東山
の花みにまかりしやまにいまをとて
さかしはきゝさそてなれあはは
待者をしまうさか しにいまた
さかさわしかなさちくわ花の
世中の花のよはなる月なれたや
なほはるの春の山もかひなき
返事

雲のゝ見ゆふたゝひみまさかきわかれしをも
このたちまちひとさくら見やは

山花纔綻

とふくにを
はきやらぬたれしみてのこらいろはぬ
さそてはむしきたるのひのもの

暮思山花

なをいはれ夢はみこゝろにかなふきや
すゝかの山れものさつは

月前花

あはれなさけ心そてはなの見をあ
たれ乃さかりは月哉みちを
このもとにちりつむ花を春のよ乃
月のひかりをふるかなりのさき
或所許合ま花をへまかなれて
みよしのゝきさやまきのはくるれし
よくねふくこをまみるかいひつ哉

祇園百花

神のまへゆふかけてみことは
むかしのうきなからさくらなりきし
東院の女房のことそ西院の様に
いりてこれをみるやさ中信の大
とかしかる
むかしそのにおひたあの雪のさや
こしのこまいにゆきてなりの…

返し
これよりあらす花はらさまされし
こまちはのいろにはさすく須磨
かくてのよとしつたへよ又の乃
女房はことその家
そのめしをなにまたるへらして
かくしぬ花のいろかはしけ
なる

年に老てちるちりの見えぬよろこぶれしきて
かぎらぬ花をめでみるべきさ
又おなじく人のこゝろそへかか
志めのうちみれかみえぬくみよからぬ波
ちれさく春をしふきしつゝみしま
よしはみそめるかしこの花さ
かりに東山よりあかきくさ露
家持みな春れしきかいかにし

志けみぬるみよはちきさんきゝし あさつゝて
うさいはかふまさくとみかふ
藤師光
いさやまたつはひのもしもゝみ波
ちるの春さん今日こそちりし
花許とそよめる
見しよはこくよねさんみよし野
あみねのみまのこ帯のむし詠

むかしの春はいかにかはなとをもはゞ
ほのゝよみゆる花のゆふしへ
家さくいつこのまつのまゝに見るみ岩
こゝろあれたや花なよく讀ん
さくらたれにかみをちりをもかなぬり
なすらむなへらむしこゝもにぬ
要ふさらしの宿のさくらやさきぬ瑞ん
名もよゆよめふかぬいつうさゝき

白雲の花をわかれぬもみちははみ
林よちりふさくらたかのきて歌
かすみよいふしやなへらよの
ちらぬもさくこの花もちり瑞き
みよしこゝをたれなもなすのたしむ宿き
これもこの世のまゝみとむ色は
花のおさ城ほつまもいたしさくら花
さきそてたちりぬあくれよのなすの

なにはのはるはいつもいたらぬさくら花
さきてちりぬるあはれなのなり

公通卿十首題ノ中に落花を
花のいろにうきやまかぜやかよふ覧
まちうにさくらみねのしらくも

落花埋路といふことを
かつちらばいかにうもれてやまさくら
春のさくらしき雪とふみ分ん

東山の花ちりのこる中に有しまかりけるに
さかりにさつはかなきことなりしにあはれあり
去年の花とゝのふ枇杷て後京極摂政のかも
とまさしいれし給はりし
おもはれみあはれなりけるとききこしかな
かゝるもあるまでもありきなるものを

返し
雲間にいでて見むと思ひしを
京の山桜をてさそふかな花みれば

おに風をこゝあれ恵のたえもあわきまでを
上西門院仁和寺におはしましける
こゝろそもみすてしかへいはける
をきたれかなんまゐるへきとて
しるしに出来房のもとより
あつまりし花ちりをおきすてれあれ
何をたのしくといひしひとこそ
返事

くわしくこそ茶よりのことたのまれき
かさねぬなるをちしはかなく
西山のをかれをうちはれ給へしに
みかとつとめしは中宮大夫
童形のもとへ中しおくりける歌
にきみれたる花をおるへきいつをあ
したつを家の家集をもとめん
返事申さんとて此枝につけける

なこぬれたのこすゑなれしもあらし雑ゆ
これをみやこの家つとはゝよせよ

夕尋残花

ゆふひさすそらやかすみかあれたつさくら花
もろともしられぬゆふすゝみみる
はすのよふことわけきくさいふ毛
ゆらぬなまもとまてはしきをちかこ
我をふことわこあしきて歌かな

三月盡日寄超入道ニおくれし
たえすみすみたはつゝあふくとてふれぬ
なふのくるゝはをとんなしも霞ん

逐寄

おもひいてゝとふなかうれしき今日暮れし
くるゝをいふうちのをさゝわきをし

三月盡恋よもそこあとか
惜しかんてつねあつくわつしあつ朝

くれぬるをたのそこひなるらん
春のくれのうたとて
かつらきやまのこすゑあらしのふきかへ
花きのしみちもしみ清人
三月尽日按察使のみこのもとに
ところへわたりて春をしむといふこゝろを
をのこ詠ちんとありしに
ゆふあそびのかねのこゑするまで中納言
まつはたゞこゝろわかおもふこゝろのまゝに

夏部
俊成卿十首題人々によみ侍りしに更
衣を
たちかふるなつのころもやまたくれねうすみすつて
をしみこし花よりそめしなこりもやなほ
或所のうたあはせにあそもほうのをよみ侍し

すのくかるく
くれぬらん志はあかつきかたの山のは
うのはなし月よみ道にまよひて
月前卯花
はきゝらみおのゝほうみをすさめ山かけ
みなつの花はつきゝ森葉りも残
三通卿十首題人々ニ讀侍
郭公のこゝろを

人しれぬわかみのうへまての時鳥
こゝろをくむる郭公かな
上西門院仁和寺にたてまつり給
兵衛の君と為房朝臣すみの波
郭公をきゝてやよめる
ぬらんとやおくれしかな時鳥
西東ゆきたかねなくさめはとき
淡路のしまもなほたひのねさめに

夏許

まへしもなきさよ歩くきるはらくきこ
むとわ扱さこりまりハおとこも友
後成の十首題人へゝよみ侍ゟ三郎を
ありのわて表はねましつは郎ら
ふふやらま絵むとわきさ奇む
許仙とんをまねきて郎ゟのうよみ
しー江

まなべ此しらゝつらなはくさ江
やさのこもあつよと一たしへこ良尼
郎又許ゝ云
松宮ひねの松先よなるはるはる
きえやそういにこ松うきこゆる
かくき江なりきこもらのこひしきり
花そ逸をれ乃母らうしもなき
なりむれ去西生当比月よか当み江

高い法を切く消んややかれく手段
ほとゝきすなきさ法春のうゑをなりゆ
礼之そくありけ同者の月うのこ秋夜

山家暁郎云と小題在

なきく為く三法の恵のやかうそれと
まあきうさてまなくかくきまの赤
三宝かく礼はく法みのふの五月

又日上西門院ニ参るゝかくへろ

いさしい揺ゝひちくひ者ろあや花へ法
なほしねうよ孫をかまひこそや礼

夜半中

ほとゝきすやとまえあるてあやや花集
みのうきまのこ逢さゝ者京さ花

五月雨

さみたれもほとゝのふとれかくや
なくこゑうわゝまちなみやきさ百家

さみたれに春のわかなのあまれたくなきに
くちそてぬらやくるしき継ん
さみたれのまよめしときもあすらは
あらをたのいおりしさみたれのこ深
はみられはやこちやをたちは家
まのをかれかめらたきさのみふくち
かわらふたらるをのゆやかしおもやくちね読ん
し波のす深やみきみ守られのこ深

連夜のほとゝきすといふことを
さのみやはまちかねらむとねたなとおもふやさき
こゑひとつはのこしなやあかしをまし

雨後瞿麦
よるひのあめはましあかれはなつかしきてし
これたくしけのぬれのちるれはみなおもし

遠村蚊遣火
をちこちのやとよりみえてふすふるかやりひもえいは

ちくらむとみする花にもとなりけり名残

ちと逓ゝ十首題人々によみ侍りし夜草を

あさはなよみおくさつゆのゆふつゆなるこし

むかしのゆかしいめのしつめやんとや

螢照草中

夜草の上にみのしもやとりて

まつらくあかきれくれなすまつる

あつけうきなのよ

むかし花に恵あるやまかけ法の花に

いさ満をくろみあらすし記

ゆふ庵の風如秋

ゆふつ人てなき花をおよきくうく風に

ゆのなたきあまれくかともみれあり

林風似秋

夜山乃きてのまとてよくいえ花をまを

おいのむ秋さゆやすて花なすく流

なかきのすゝきなすのに
秋はさぬと井もわかまたあふなゝちとく
いさもしけかきつゆしく泪かな

秋部

秋浅雨泉影
いはそゝくいつみの草の木をむすふそに
まつしられぬる秋のいろのもなみ
旅宿立秋わふかく露
さくらむすふきくのいほのよあらしは宮
あまこりはふるきの風たちくるゝの方
立秋述懐

このよはあまてるかみし哉いかさまに
なをやはらくるひかりのあとしき哉

七夕

むかしよりのはしよむかつてねかひやきら
やそせれたなはたつめもむかふなゝ
かちのをとよふけてけふそきこゆなら
いくあきをちきりゐぬあまのかはしらこ
おかくく野をもみるさいはいと哉

あきのよのみちをきゝてたちやまてしをきく哉
そらくうきて志あきの花をみる

秋のうちと云

これきくむしあまたなかれのかたはらに
すかむれてかたくさかしのこゝ思
さなしのものきえるこなく野へにをさは
虎むしはむしそなむもゝちなれ
秋萩にふえちいさみよゆうむこやきのく

ちくさのにちらあまのゆふくれ
くさのなれしはゆおもしろふかし
まきはゆはばたまきるたのゆふはなれ
木ちしにもみえぬ文字すそりの志
草のなれしろを
秋やとろふともしむさよのね尊む
とよそてすさゆくへやさまるれ
こり詠よめれ

かはりのねたてをはきたくこもちをふみまよひ
よものあはさをなさそてすくなれ
いてうの志りといふとなれ
やまそれいはあひのねうちうつく
しのなく様すあはさそのるしれ
ちろすのに志りをきくといふとなれ
こゝとなれくなるやきうなしそるしれ
あさきともあさのなかしりの数

秋きくさのに

ちよのおもいつく露おきさてわかれて
さえみてこそのとはゝもしるらこそ

鹿

山田もるわいそぬまゆさゆふ
なりとやよみさつはをしかなる
わきもこやあやなそめむあさゆふ
むしたこ秋まよしおもくことは

秋ふきしたちうはなくなりいそれの
く清の狩とに清秋たちけさ
みわる鶴波いまするかくゆふくれ
ほたるくく月のわなまわる
清里やまさのましのたてみまで
月のやうちゆきの紫なの露
いわみるふ為りまゝに清さろすむ
らちの秋のちま雲やきゆ流

おもふにはよのうさをもわすれ思ひやら
の事のねかひ也右月の心
後成恩寺千首題にてみちのべに月を
月みれはちかきのよそふるさと見えて
山もとしるのうきまろあはれなる
道堅卿十首題にて浦水月を
さやけさのくもりあさやみなをる月の影
に川なかたえぬすゝかはの下流

深山月といふ心を
あとたえて人こそかよへ遠山の心
なをとふゝくこそ秋月ちゐまはれ
ころそのあはれの月といふ心を
おもひたゝぬをまちにしの月のもとに
くもはうちならすのゝ草のみまさる也
うみのつらの月
なみのうへはちのめくる月をあきなれて

花あやめ哉いはのあふそも
まみよしの社まてかしうた
あやせぬ
小あるきるまゝに流さるゝいなつまそまし
むかしものくやまとのえ此月
八月十五夜ひとくもなくて照し
夜ふける中おくてわし
月のまとしあさのすゝしみしなかれ

こよひ乃そら此をもろゝかな
西行
なをおほてこよひの月此くまなく
かくといふ人もなゝやあらまし
八月十五夜ニ大家まうりいなそ侍りし
こゝまてう
いよゝかは浪うれしかつらも此みあら
ひのそ月なきいひてはなれかし地在

ふこと

あなしよ九月をさけしまうかおなかたま
しきみなるらんよ君ゑさる路波
よりよきのあうんのまへきく城
なほねてもつりつはりく法つ
なをとてえるにむもひつけく縁
なるまの帯るにちつうけろふさくれ花
かものらうをきなりやをなわるかな

かつし

うらしまはこの君をよめの君とし
さくもあはしゆへい添ふさうゐくり
そのさくのつくてのゑみたる帳
ておもうふおもひさきなりわしぞう
このあふむの君もへ君たさかえ
法のそすそ
こうなしう君てみれば路よ君れとかいさく

のおもてのうら野ハ池ニみなのし

返し

みしまにハ井ろそ志てきくれ

たれや都をはなれつゝんみね

こ志てうつりちりあらいろ山さめに

ちつりしてハさくちらんうつほひちさま

若ゐとくたれそうつてたつわし

志るねやうよ都もてもやちなあ縁

うちのきくの露うちいやさきと

返し

みやこまそやうつろをある菊ぞあれ

此天をきまつる波ちか露ことかふ

さ語しかよかうむきくのともやか

てにこころねかきてきくのそる

まの凄きへつくしし

世をあそしうき此いをりよ長み石

ちる花にかゝるもおなしみなせかはあや
うらし
世をはなれ遠きあたりやまのおくそきくは
みしいにしへのまゝのこひしきにまれ
そのうちのおもかけのみえかくれ月ちの
りやうしおゆるみのなみのまへさつの
あれくかつなきに聞てやけるへし
みやこをは秋のあはれにすみたの庭

もなのすゑちよのためのいく
をさと　もはこし春
松ひやれひ志乃まなのさひしさい
なかきみの事よかなるつさみかた
公通卿十首題人々読侍しに野風を
すこしのよはのまれのひきて
こなたの秋風のゆく
九月十三夜月くまなきにあの

月は春秋のにもより
よろしくものさびしき方はあはれ也
あはれなる月ならひなどやみし
冬の月
くまなくはれたる夜はまたおもしろき所
雲の月なるとみえたる也
あさの月の雲の江
ちるもみぢのころはしぐれのまれをあれ

よもすがら月もみえてけふのやど
あさことにちりつもるもみぢにいろそへぬ
まつしき森にうつろふ花なり
すむものみちはあさきゆき雪
を
松くあさのくもりに雪みえちりかる
このみすひ山をとこもえしあはれ
海辺の落葉といふ也

ふしのまれにもみえここさふらふまきはみゐ
又ふるさとのふせをききゝ清忠か詠
秋のうたよみけるに
このころは清見かせきのなみさえてあくさのうへに
なかれゆくるをそてあきのゆく跡
あきやまのくれとふかくまちまたれ
うちさくあきかふにねのかせの詠
名の月の清こころさしよにわしよ

まみしにおあしのいとかき
あしたゝ中納言かのむすめ
おくれたりし
よるふくあらしにいはてふらふ
みやこともきく雅あさはきかりし地
なし
よのすゑあはまちてねまきえみやこまて
いはえあし乃おもうちさえし哉

おもしろ右近權少將隆信朝臣
郭公郭公なんといふもめくらうてきこえ大よそ
そのしらへのみあらひたかつかれし
深きのむかし九月つこもりまでなつかし
ほかに中をくらし
君まあもてたのみおきてむかしよりまた
いきたへてさまよひてあまたもいぬ〓〓
逢于隆信

わかれてゆくあきのかたみにわかれし
〓〓〓〓いえてくいとこそのまことし
俊成卿十首題〓〓〓みは九
月盡を
くれてゆくあきのかたみをおきて
まつしるしとかいはうつりかはれ
九月盡日開路あきのくれしをいはうす題を
なをもきはまることしかなしみくとれ

こゝのさこさゝやあさの山く路ん

冬部

寒山のうら枯すゝに
冬きぬ紫けさしも表ろく山さとれ
しものさかういかせくくなる

孀園冬来さいふかとを
わもゝれはなゝしまねやのい出あ
さやさ海しぬ冬たをさまやま紫
まつくれを

このさとはいくたひきゝぬさへつゝしくれ
めくるやまかやはらふかゝうらむ
山のは為忍しくれといふと哉
いつまてもしまたゝのこさくにわきさゝあなく
しくれくめくろみやま庵はと
さとみよしのや志あまてまかはしう
あらせよ猿宿時雨といふよ哉
うらしくれものさひしきしのやれ

ゐやのゐまゐえよ家こゝにしゝ哉
しくれのうさとて
世のうさ哉ゆめやすらんさよのねさめは
うあそしくれのおとのすらん
柿子のされいあくれさむし兼子み
ふこたちくこさのよ跡うきてしくれは
上東部殿上人法性寺まて哥合
し候ゝよ開路落葉といふ哉

森山本 やまおろしはなをさそひしたかみち
うらいかたゑをますまのせきのゆきあ
白川まて許侶もんうちあらそひし
さそつもりし落葉ふそとあかぬ
こころくへのうそさめしもの此こちられ
みなしもおはよみのとかを
露所許会人まゆすて残菊を
ながみれおおいおちあらたきくの花

しらぬめりもよにあらしひすれはきみ
三遍紅にす首せしのこれる菊を
むらさきに春のくうつろふきくなれ
たえぬ古てのはなさきあへぬ色さきてこそ
のあはれを
うき流しにさへのちかきもしろいとれ
しらきのうつろひあられにふれまし海
白川のうらあるちよ水鳥を

おきはつせおにあまのすくよあさなさなれ
さえくいわれなきみのこゑかさね
はほる夜すて寺合ほよ

水鳥を馴といふとは

みいはとおもうきさわのこゑ哉すふれなれし
おもはきもやらねさしとおもくすなる

千鳥を

うちまくらすみなちかく比ゆふされに

こしかたくにもなくちるかかな
あまねるあやのいそやなにとこもる
きみれあなたまちわすくなかり
ありあきの月さえやまむこのうれ
しなひのるさ千鳥はなふ
こなかをよあろ
けさのあさこなかしぬらしあまのえ
ひいまふかれゆきこいはまも

又道以十首歌人々によみ侍りける　懐旧を
なきひとをおもひ出ここちしてけさみれは
ゆふこころ草葉のうへにたまりたるあはれ
俊成卿十首歌人々によみ侍りけるに　雪
山さとのかきねはゆきにうつもれて
野邊とひとつになりにける哉
冬のうたの中に
鶯のなくいにしへの山のはなさへ　定家
松ほそみはやまゝにまかりしいにしへの宿
雪のうたとて
いたつらにすきにしかたのふるさとの
おもひもあつかね世をもふるかな
山の雪を
いさやこのおくのふるみちたえぬらん
みよしのゝやまのゆきのふかき日は
高ねよりおろすあらしのふくかせに

ゆきといふことを

ゆきふかきよのすみかをとふ人ハ
こゝろありてやけさはきつらむ

廣田社哥合ニ社頭雪

なにはえやみちもたえしとふりしきてゆきは
神のいかきにことにつもれる
ゆきのあしたにまちつゝやまもとへ
ゆきふかきかたのなかにもさかへしく

ふるさとはねさめの代ハあはれなきまさきれ
西とゝと
わかやとも山の雪あれておもひいつる
あさねたる人のあとにもかはしらぬ
ゆきさかりしあとも三きとく
すりし松のたちならひいつれの道
今日またしらねんもやとふきわけし
うたあとふもなきさきのあとの雪の本

夜こと
いまうちくつろいてあそもすのわたらせ
ゆふのきさまさくおもひやられとん
冬のうへすつよ
家こゝまて思ひみえもれ成をつゆまれ
こされねをいふとあさゝ題と
いのちのあさいふとは
風あけしはられはらしれえられあれ

あし人みなおろれ法しゝ分み
禁中神楽といふことある
上きひさきさゆらしこそもあまたゝと
くらうへもも神あそひしるゐ
二条大宮ほりかえ坂卿也記そもひし
しのやとりして神くらやうてあ
まことをいそうきくへまきと上西院
の兵衛のすつしる色こ流かりて

ゆふさりきこゆけてさきみちたるしかさ
あかしにたるひのいろをさこもとほ
ぬし
きのふまてはいろしらの花しらんへを
しらすめぬもとのみのめくみの
かくそはかなしわたをとにれき
はるかにそむまとの
いはのまたしらのむらようへゐ
こゝろえたるひのかさをみなくさ
されやうたのむねかたゑに
へしねしわにのをしゆふくもさ
かゝるやうみかたをすゝる

夜雷

やよふかみなかくきみのまへあさけふをも
んおふくもみえわたるのあ
みそのうちとて

秘くとしはつもれるゆきもひまそへて
あはくなるまてゆくみゆきのさむけさ
としのくれに左京大夫あきすけの
もとへつかはしける
としくれぬことのいろくみまてすきて
わかのうらまてもゆくこころかな
返し
としくれて我はゆくまておもひおもふよし
わすれぬ色やまつのうら浪
堀河(?)うしく我にもうつことたへ宗(?)
侍りける(?)うたてまつりしの色(?)
としのゆくまま思ふものうきまつら波
和気(?)まさこさわかのうちた色(?)
としのくれに前右京大夫(?)みのむすめ(?)
世中のまことはわかこのよろこひ(?)れ老(?)
たのむ事もなかくたれか[illegible]

返し

わかみこそもとのみやこにかへらすは

そこゝろあさいはあなたより

とうの中将さねいゑのあそんのもと

とふらひのくれしは

さらぬたにきえにしとものなかれぬるあか

猶あらきさしとふ[illegible]のれ侍く

返し

なにとやさそうさえむせぬ夢のそらかな

きのふたにしらぬねもしおもひしれ

としのくれにはあられ

ゆくとしの人のかよひくらふに

おしあけれしられきれ

俊成卿十首題人々読せ侍しに歳暮

かくしつゝとしもくれぬるにたのみ

あすやまたの山里やまさるへき

林下集下　戀　哀傷　雜

戀廿首よりこたへよ

えとしれぬこゝろいろえしたる身にしみぬれしきぬもまれ水

おもふこゝろをかきかさねや

ほのみえし月のゆくゑもしらぬ身を

こゝろのやみはよふかきなりけり

なをしれかくてるひのまもむにえ

おもふにたえぬものからなんあるけれ

なみたなかかなしくらしてはら見ん
まてぬるよくつらはすすまもむすぬる心のかせ
ささはなきはかことなるは人しらね
こひちくまふみをしるつせよ
おくやまの春かわの秋なりのまよのこ
ほのうらいしく人ないつゝそう
きみをさ波都みよ忘るしなかし見えかや
さてこまやこのくあるれし良ぬ也

あさのこしきはのうちれあはれ人乃
いたるそてはつく於かゆすのかゝ
あさなさはあはれのつゝ文みまよひて
おすのきのここうをも出さるわまれ
し
あさまきのはゆ浄さ彼のうさつめのあれ
しはつゝて出ほりゝくかねらしな
きみこよるなみなまちのまゝはきてや歎
此のふちてもはる絶えなつきなせよ

きみゆへはくるはしさにおもふかのまし
かくみのうきをもいはてはれぬの身を
おもひしみられてみるはすゝむれは
くるまをまはれはをつゝてあかすのを
いかなれやかくはめきしはるをはゆの乃ゑに
くさのすゑにもえしもみかゑ
あの月乃くさそての(は)ゆよしましやて
志のひよめるこゝろしきのそてく

わか恋をもえをみんぬめうらうつゝ
なこのしかしくさかたくさらかき
しのそはかさころもはかよのよすゆ
ねをしらしなくら月をみるよ
秋のこゑはわれのきぬをやつれきまよ
さこゝまておもひをこくもや
かくちのまくろもよしぬあしのみかけ
あこ乃きをよよいそてこ恋もあらそ

いかさしにまつたむつにすつかりよ哉
なけれあつれなき人のこゝろかな
きこゆるかすみのかすかすきみまつゆ
あの月法山のまてかつらは
かうてはいつえてかゝしほの
よのなかしぬさなつくみて哉
こひしひてちるきんいのちきうつきぬ
みたれよきみのゆかりまとる哉

恋

ひさしさまつきよさかくにいる
さくあわれしにきむやみのかし
大通卿十首哥よみて法住寺に庭恋を
きえもしれぬいのちのあさやすきかひそん
けさ行ころものうつくのゝうへのこと
俊成卿十首哥よみて法住しに恋を
こひわすまあるよおもひてよし見哉

やそ秋かようなりける秋ぞ

白川寺仙せんにてあそしけるに
うき人乃月をたまたまみれゆのあかさし
おもひすてしをうきよのちんぢに
白川のうきよみこもうつるあかし
まつしにきすみえるこめ
かりすくをこむよせかけてちこさなる
ふかくもおもしきえなし侍

法住寺殿にて哥合に隠題紙燭を
よみ侍し
あさきみどりみえしも[illegible]わかなを
てらさのさらはかなつるやまた
潟
おもしうたわるよ人すみそめて
このおもひしまきそいのよせうきな
たこ[illegible]とのみえこなるつらさ
あるまじきるのまゐて名よるしあ

さくらの[illegible]

わ[illegible]

き[illegible]

みつね

いま[illegible]

木のま[illegible]

[illegible]

と[illegible]

み[illegible]

[illegible]

かつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

しのひたる女の[illegible]

[illegible]

[illegible]

もあふたれゝこゑあれしゝやまあゝゆ
女許へはつゑし人すのえまて
きみゆへなさこんいのちをすてゝよの
あされしなともこのきらしゝやはち
かつあこと
なそてよのあされしいなくつゝけさらむ
なれしゆへなさゆゑいのちなりせん
おさなし人よ

こゝろしちんおもてくるしなさよりもせいそよ
ゆふへのくもたえけれとなくさん
かつし
うきとなきさうれもいつなのむつまち
われもゆふへのくもこそなりすゑ
あさきまてとやしたる人よかくあて
まてこいふあさきるすさまいのちやん
きのふたれなさよなるにはあさ

七月七日女のもとへつかはしける

けふまちてそてこそいたくしほれけれ
ちきりしほとはいもかまつみのあき

かへし

としをへてまちしぬるさへはあまのかは
たなはたのあふをうらやましきかな
女のもとにかよひけるをいとしのひてなりけれは
かくさるへきやうもあらしとていひける

あさせさやうちまていひたえぬれは
としへけるよしをなけきて申けれは
かなしさんことをきけるはかなきあはて
おもひのみしるしのはてはあされさん
あをやきのいろもまされるこひしさは

かへし

あさからぬおもひのそむくやまのは
うちの月をいかにかはみん

としのくれぬと人はいそきはへはへのつゐに
あまたあるなかにもかれぬるはしかなきて
こほりとけさるをいまはさとおもふとく
志のひするとものあはさりのこほりのなは
おもひしりたまふてもあんするにありとも
てならひに
年くれてあさてはいのちをしるまいに
ふねにくちぬる秋をまちて　の家

終中

秋まてもかはらしものをくれぬれは
あまつかりのはなはいかやのこらむ
又をよそて侍し
をかはりのかきさして霧かかりてくもりぬとも
志のふのみをはきえみのまたく
みなの女
志のふたるみちをさとしつゝ秋のさくらは

おもひはまさる これらもめかしあて
あら所よそにきゝし時は雲居まてまさる
こひといふ心也 人の身まてわしに縁
なしとみすれともおもしろくしなき此
きねれまつれてみえしつは法め也
雲井まてしれぬあこめすのくるしけむれなき
みてこゑをきさてもまよしこめぬれ
落葉すひといふ事也

かつのこむあふまつ庵さみかくきれ
なりのれとよりてよのまとわりのきを
聟不来恋といふを
君のあしをとすは法よめもあきてあきあれと
れゆあつとふ君須磨のまき法
雲まそてのちあふといふ心也
秋とさへ波もちやすまるおもふのはの
みえし波かえるしちやまをし

小はのうきねこひ
こゝろまゝあらぬふなそ波みやこ人
こひしきをこひのそらまつあ里雲
風もやみいまそまよしるまもふ松乃
松くれぬものゝひまうあ里雲

物西雲霧

かゝ流へまうしもえしれぬ恋いまそうそく
もみなのこなとそあらん色もやまね

夜半恋といふことを

なつかしれたゝ流の月ならいそうのも我心
わすれん人へ吹つゝ良よしかな

寄鏡恋

その人に吹つ寿う流くしさきくまふらる
あらぬつゝみをみまうもかなしぬ

哀傷部

故左大臣殿ことの時仁和しまて

山さとのあるしわのふのあしさ波

しのさくことゝ思ひたてしよきかきさせ里

おなしく蒲陵前司東為定朝臣

ゆふくれて侍し

おなしさやあく人こまよ秋たかなし跡を

いとゝ山さとしのやなくさ涙

又

はしめらくさむらのなかにゆめのうち
をわたりすみもしらぬなきを
おもしろみわ三位三條のきと大中将
公光の朝臣わすれかたみにさへて
かきしさふらふこのたひかやうの事と乃
うちものみなきむつれしをとも心く
永正の時九月九日交

へなそよつりなわし
うみまさきこまのこさくそうとみまみて
たまのたなきさを佐むわかかれ都

又こと

かちのゆくうきをさくの花みても
さころたなき佐さみを佐むしかめ
はいみをそわなしらんかん院
みまのつかそでくせのことそいてを

うのたしらよかきゝは侍りし
おもしきやくものうへしるきいそく
きよみをけふまてなのそてみむも波
おもしろき九月十三夜のゝきよや
月はなるゝなまし に
喜のおもひたなみださへ月をくもらすを
やどよりほのめかし人へおくるとや
四十九日九月つごもりのころはあかる侍

ゝは人くちつかはしのはおほえゝ
ふるさとそこなむしほとゝ侍へきこあるさ
おもはるたくふかゝるしきこものを
かくてのち人の法日記ともかく
おほへたくちいとのちをみなきひよ
まさとふりのなさりのるしさ
三宝のおほひよしわしる 清少納言
のやまおくかたもし

いさ路のえかつねこ川のまゝかれちは
き、わするゝもとそて私なしかきる
返す
き、わするてあらねなのゝ波
水の心をゝ見てもつなむ
為女房申しける
たはるのゝ花のすゝきをきみのみやこに
いかゝはさこそは見るらむ

返し申
たれぬてなるくかこともあはれに
んとふことのちよ法ゆうたまる女
たす、わにはうへなつて雲林院
ふるまてそ月の事をおもいなつ、
玉ちたも田舎しゝと成
おもひもやくものちやしるゝ花也さま
たのこゝち路ぬあるをみむとき

これをさして　右宰相中将
冬はゝ春むあきはいろもなきはわれ
あさつゆをおきてかさねやあきのよの
おもしろき浦紅葉のもと(中)にかへし
うさきみのさいしのれにおもひとむやさしは
うこきなきいとふはまとかへさ
左勝
なつかしみふうこきなきよをとはまよひのことは
いそぢのをかやしとふめく
右　しゝん右宰相中将家のうた
ふさしあしひきの
もみぢばのあさいろこもいてちらん
かゝるきつのをはかさねこゝろかへし
左持
忘れむやとのこまつのかみなくたく
なみふとくまさらわなし

ところの鏡を枕字として月よ出て湊
予よかきそへ借養生とす導師にて湊
慈僧都朝よりおくれたりし
みしひとのかゝみをなかれたよりすのみ
むすしきゝよはいよやよせあなる
西行
むかしさは波かもしれしよすのみ
よるの月なるさもしけれ世あ

こゝろなくてや中ふもし
うさぐもしくもくれぬるてはかなや
いつよ法きせあれよのくしん礼
僧都慈円
なさにさよあかねのまるもはらのし
秋の心も法きしとらおもふ
そらのかよ 右京權中将
うらたゝらしおいもてもなふくれ

そのきこゑまさるやまさらて也
給ふ
よの法しのみたらしのくれなゐのころもあるにもあを
いかのまへきたちふみちのあしは
法金剛院の花さかりをなかめのこうける
まうけしにおりあひてこゝろへゆうべ
そのことなむすい法者侍し
花みるかはいくはくちすいかれぬ

まつはけんこかへ人すなきあとしれ
これを法ゝなく上西門院兵衛
たれみてもむかしのよかたるこの花を
さらぬかへさのこゝろすゝめん
この寺を依恵法師みちをすく
むすひきむすれのしるしのとめたる
みしもたえなく法ゆかりつらまし
なる

今やとくも君かうみやそ、とのもは
たれのしふるふむすひあれなと
と宮みよりそのちまに三年在忠
のむ上西院に在りと経れてもなし
住ゐそよそのころ世中さはのしけり
於保ろうさよみあまにふふたりたる
むかし花ゆゑなみてうひあそ
返し

秋のくさむら草しけるあさふくいらる
むかしなき声ハ心あはれのくらん
小野きむつかしみよるよしとひ
ところあらぬ屋のきよかり
あさよしぬうきよみ住みはゆあるに
こころくふへきたるきよきしなと
返し
かきわふきころのやみにゆめのうきは

むかしのすゑのまことおもひねる
むかし右馬権頭隆信朝臣は
や行くしたるに
おもふ人へなすのたよりはあらねさん
このわかれこそのちのかたみ光
返事
みのうきもこのまさこにおもひて
あしたしの情にむかふ

むかしの心　　　　むかしくれ
其二十
返す
人をさへみまくほしさのかなしさを
よそにてねさまいはそしうすまし
依被御おかくわつらひて九月盡
おくりきわし
むかしよのあさきのくれまてもしみ(?)

こゝしにも我かさきにたちぬへき

返し

こそよりはぬるゝこともありこしさまおほえ

のちのあさきをもたのめあふな給ふ

兵部卿やまひよわつていて中納言たてまつる

きこえさせてんとさきのもちよりてさきもまうさせ

つねはわすれ給ひつゝもすこしも

返し九月になりてあさましく

あさちふにおくしも海といふことはかなは

きくのうへにはまたまさきあや

おなし御もとに、おくりし

春のあさぬさんなつくわすれなしくら

たてねておうさきのきさらきすかた

返し　上東

くちなててあるまもあしはらのしくしぬ

すゝのむしのもよりあやうき

しげむゝところどころもまよひしころ
九月ついたちころや法輪よりかへるさに
大井にて三日の月みるとてよみて
大井のよどみよどみやよどみ川よりの
しらしを影むかひたるこそあはれ
志清人たつとしも月をみて勇
おもふことなくてなのみえしもなに
川きよくみゆこゝろやし

いふなからぬよもなかめしをやくぬ
こゝろやくくさくくてわもそもある
うつゆく月のなすそていみく流れ
しろあなたもそたちなしうきよきを
月をみるしろの水のそこぬ亂をゐ
志たしくなるものもあらゐ禮
右筆繁成範自震より人てよはそ
月をみてあるはよるいるつきよゆうか

いかしえもかしこも風のおとにもよく
くものうへはひきをみつきこよひも
あまさかるしれねわりこなき院
御しばきの日はとりや御前歌
きゝしらぬ人はゆへはくものうへの
月みしうらしもやなきし
院のくらゐにおはしまして時女房うち
さきつかたまての月さへのうへまてあ

かひくさりのせいてあしあしくさまやまと
くやし
雲井の月にちよさもまゐて〜しより
こゝろくもものうへにてあそ
給し　女房
くものうへはうつろもきさみなは
月をみまゐていてしきかなふ
月のあかゝりし夜□の中将さ給出

のまへかしつのまし
おなしやよひはまみてきなのころ花
すゑもろこしの月かけ
かつし
いますかくはちきさみえいつよしの中山
花すくもの法をなすてみえ
院のかたおほちしよ手て竹取上に給
しいまおそのえぬるつふしてまゐる

里人はにしてまゐりてけりはあ女房
の名ちの里
わすれ花をあのかやつまむるみこう
みつまくるしき桃たちのまきれ
也こと
なかきこころのつまなかなか院の人かれ
定家そのえんを法ちうてこの歌
上西門院にまいりて人のけふみ給

しにおとさいまそ
今しはもとのむみさくみのうかれしまれ
まはにとあれやあはれわつきたなき
かくてつきのひかたより多くのよそ
むりしあとのむみききのきれなかれた
すみもあられきかくそしらぬや
又し
なみふかのもあられをしひさはきらしちのき

まはのえもんけさくまのたあひたなき
又　無業
なれへのきこゆるのむかのひあわきちの
みならくまはいちよろさのこん
内裏まてよもそろめ前よかろう
ありてあさてよやあまもし
なきひとさあのぬまのれのあのいきも
かろあかはなのかましもの也

返事　小侍従

こよひこそえらひたちしらぬいはしたれ

あかねわかれたまをとそうつゝみき

新大納言實國の許よりすまわかれまれ

ふみをはつゝしさかし猶さらん

ーー家はきころくさて哥まし

みよしのは悦もわらゆよはちかのむかし乃

さらし歌をくたきかをへいなをし桃

法安すよ

あらの紙をくたるのまにてをかしこみ哥

かつまやとさのうれしやらちみ世

内裏にまいりて後よしよの法花万歳

ホ中のせ殿しはたすめそうけ候

まく女房の中よかゝるま志

ゆきのねのよろは　まてさきこはしけ

ふそくこふよみる　ここちやしの給

返し　小侍従

よろつはよのゆきけれぬるかれはなのそら
をかしきみつそのやまやこそまつし
内裏まて人〻ゝ皆給ひてあそひ
いはしよ新大納言ありさきとあそ
ひてやさしわするゝやそての袂かな

返すハやさらし

あちこちなくころをさへかへつるかな

きみをおもひそめてくれし袖をも

返す

こゝろのうちにつきせぬなけきのわかれしる
いろいろ人〻またなさけふかきゝかたき
右京太夫かりまかせの網代殿より
あしころやとつかへしすまひ
くものうへ越おちひたえてうちしきを
はなさきいぬることやさしけれ

返し

やとのうへはちよとそやちよしもあらしふゝき

まほしをもきこえきこともかをりたる世

新院のかくれさせ給ひし時のことにやなかし

きこえより侍さる御殿のまへにやへやまし

こゝにかくれしくみしよの月さやまれはしまえ

おなしくもねをあらはれさやあふ

返し

こかくれゆくえりの夜は月よ中にねるは

くもちをみるくもあはれわれなるらむ

この哥は二条の院御時殿上にてをりて

人しれぬ木はうちやよの山にわたるか

くれてのこ清さをみるすゝめさまやか

一に殿上ゆかされたるのこゝろさ

頼政三位してたつるはわかよつゝ数

のほりねるみしなれみせしれたるし也

猶くるしそおもふもなく侍りふつきなし

右勝

かきやりしこのしなのゝ松ふみは
みちのくにもなをかたからん

うつろふやうつらぬおもひしてかくもあら

左未上西八院女房喜道ことなる持勝

ちる花をおしみもすれしみ中よりは小ふかし

右中よ中はおもしろし

いまし へのみ松つよのあはれそ常なりぬれし遅き

なれしとこゝみこえかたしみなみたなかるそよし

右未左勝

君のこゝろみぬ世の花をしのひ侍く

あらましみるみをよろこひみとをはいふ

みやいおもしろし

しかしははあはれとたのむかくへぬれし

おもしろきもしれやとのはしきを

西行

おしまれぬ我もあはれ無しやまねて
られしこゝろをたとひやみ法く
糸桑又やしたましし
なちの滝の花のはてよもこそさらん
またしこ毛恋のきれさきよやと
ひす
されどこゝろのかてちしみ縁なるあはれ

わらとはなれよんあそびの縁
又あれれなりを
あまれしどもなまひたこ毛よこ縁あひの
この世ははかなみをよかたきん
こまふれしおやこたちやくしたる
人まくかくさん
空仁伊勢国にてうろうをまよひ
いおおひやるんややさんよかすのむさんよかる

みのうちあまりきの月

返し　宣仁

なかくしけふたこのうちの月みてぞ

和歌の事にのうちにし夢

左兵衛督成範卿大原の朧谷にて

寂然かはりてかつくしおもはし

おほくのおはしけるみちをはなれ

いふのさきいまそしらまし

返し

なほなほもすむかなしきいのちも水は

こころあさくいかにもひとかれぬ

日吉神主祝部成仲あまりある

こころかなしみをものをいふ見て

あまりふしのこさまてのなかを

ころはくにかけのもとの松

返し

むさしハうきにままふみをうしむいともし
しのさるも人にも神やおもはるる
むさしうはよつきぬのしるしにて
小侍従
このはるのいろはうつ水のこころ
よのうなるこものかになもいまを
返し
このはるのいおもんかきみをわすれぬる

又ちかのむらさきのものはかなき
こころえうち人をうらやましきのなく
ころまやくこころのかこちをにつきて
はたたくはつかれ
あまのまこのみかれをこころえめを
よものあしはさつさかふとこも
返し
ことのはのものおもふものしあさの

いとふしぬこのかたなるらん
むかし人のみのりにあへるそ
まんたうはしらのほりかさす十丈
つくりし
家をはふるきものかたりやおほく小説
ふかのせまちまくろとふまて
侍りし
君しのふし緒まつたとへ数不尽てし

月のこそ云まゝのせかさきまてきこし
大家のさいせんこころはやさいろきのを
堀るもまそて高るもしに中たつわし
このまはたもひとくしなきみるれとん
むかしきみのみとえあふくみう新しき
法師
むかしめ皆ろのまのしきしろいおもひしる
すみあるわつのうち緒み為れしも

又こゝろのあ二首のみたらしに

うくもようわさひしきをみのえに
まつふく風乃おとをあらせぬ
家こそてふらの手いそてゝうらめし
なりんよるもみゆるわのゝうらまつ

槇のうさとて

みよろひくあひのうらにも絶えぬあふ
月をとゝをとをらきてはをし

まつせこうのうやのうらなん家々こと
さこみものしの人もとひきかれ
まつうゆふくさもつこうあふきをまて
まつもしらるあといそしるらんや

廣田社哥合に海上眺望

むこのうらん波なみあありあさよみわたせは
まゆそみかれぬあしのはやか
秋へる山さとまては(?)へまつしに

雜

山さとはまつふくかせにみゝなれて
けさめのちかなるこのさとは
いかなしきをとすゝのおとかれせれ
うきやすきこゝろすみて
よをそむくかたにはさてもおもふや
われうのきやのくさのいおりに
まへよしの寺会さやよと述懐を
おもふれはやこきへすみとあはれわ

しはみゝしとはきゝふさおもふは
述懐のうたとて
みさこおもふいかにくれしもしらん
うきはしくるくもなきさまおもひ
廣田社寺会に述懐
さらとんにしまはをさのこそ月日みと
もきのちやくかたひすゝむかな
おもしいはん

世中はあるしくもやまれおよ
いくれたきゆるなるまゝも

上陽人

忘れおもひたかつまもくるにすくれ
きゆのうてるありつゝはる

李夫人

うはくさもゆめさこそたえてあひみれぬ
うらみさへあらきこえまん

陵園妾

むくらのなくよはつきくものさは
さしこもりまとみつたのまよふ

王昭君

あまそれをなかまもりなきひのわかれしまちよ
てなかりことのねをかなしね

楊貴妃

なきふたとのあひみしよりそのちきりまてに

わかれくの道のつゆみちにたち

源氏集を見太政大臣俊成卿より

あててかつつむくろうてかきさくつし

世中のいろたかる水をいとへんたるをこそ

えとのうらうろみゆる

返す

いろをいとふのさためにしあとはぬれ

うむちろいわろさとおやしまなる

賀茂社にまうてけるやこと代許の時

こんをとえらひて當は濡子ありさせたまふ

かたをなかきはてて政所の女房にしる

まてて紙方をかみもちにいるとおりて

わかれうえるなからのそのものをかはきてれ

おさのひもなきことしかくさくるかな

返す　重保

わかのうらたかみかなまたはあくまうしは

かきりはあるもむすへいかくもるつき

序品寄て人への心ひとつに
あつまりしのかすをうらしにけさつれ
みのりわれもれのこしくつしとは

提婆品の心をよまかせて
わたさはいつのさをわくこそなれて
心の月もむかしよりすふ

通観十首題ノへ読侍ける　行基

友こいかと越
ちきりのとききくさうかし思ふきくさ心
さらふへ恵をしらるくまとのむしろすけ

俊成卿十首題人へ読侍しに観音
そのうらよむれぬるへあるふさこそはなよ
いくちふちんふちの花すふ

又いまものうさとそて
きみのよはいくよのかしらみすむきのからや

みよしのの月乃もまちこさめには
かねてより思ふにこころきみはゆる
むつまじきはるのむかへばなつかしさ
大将よたなかもとかねまし時後度
道のやかなる二首
くものうへやちつさまつまかこたまなれし
ほしのくるねもうかもひえなき
みそむさしのはまぬかうめしさむ

あさかせのしろ乃人をまちや
兼許
のほるつきおしのくるねかはらのはに
くものうゑまてくれのつまをまさきを
なかのかまもいりつわしとおもふ浪
ふきはらへいるみゆのちかのゆ
大将まろりてのち頼政朝臣のもとへ
やしおくれる

ゆきちるとしのしるしにやしれのさく
ものちやしなとまとのなかにはれ
みし
ちとのおろはなしししとあ大花のさく
はのちやしへもいかゝきものな
於寺し亭を師光朝臣のもとへつか
はしけるかへしは
ちかはやしちれはしくもつのうら

さくはなのちるまかのもとのこし

132X
23/3
1